

員として滞在していた間に、彼の翻訳に協力したらしい。表題は Von des menschen körpers anatomy, ein kurzer, aber vast nützer ausszug...である。ちなみに独語版の先行研究としては H. E. Sigerist の論文（一九四三年）がほとんど唯一のものである。

次の機会には③④⑤の特色についてスライド供覧のうえ概説し、さらに、ヴェサリウスの著作全体の書誌学的研究の現状と課題についても付言したい。

（平成六年十一月例会）

ビデオ供覧「呉家の人びと（野間祐輔先生出演）」

岡 田 靖 雄

これは一九九四年七月三日に広島テレビで放映されたもので、呉市提供による「ズームアップ呉」の「呉ゆかりの人物」第二回である。呉市史編さん室の千田武志氏が呉市長ノ木町の呉氏旧居跡に案内したのちに、呉市中央公園にある呉文聰あやとし顕彰碑をまゝに野間祐輔先生が「呉家の人びと」についてかたられる。

野間先生は広島県で呉秀三先生顕彰の中心になっておられる方で、呉けい茂けい一いち先生を何回か広島県内や瀬戸内の島に案内された。広島市での日本医史学会総会の副会長をされ、わたしの報告のときは司会をしてくださった。またこのビデオを

おくってくださいしたのは、同総会のとき事務局としてご尽力くださった広島県医師会事務局の菅田友樹氏である。

野間先生は統計学の文聰先生、精神病学・医史学の秀三先生その弟、西洋古典文学の茂一先生秀三先生の息、経営学の文炳先生文聰先生の息、内科学の建先生文聰先生の息について手みじかにかたられた（電話でうかがうと、「しゃべったことの一〇分の一にされちゃったんですよ」と野間先生はいわれたが、三分ほどに要領よくまとめておられた）。

ところで、供覧当日は時間の余裕がすこしあった。そこで、ビデオの最後に箕作阮甫五〇年祭にあつまった一族の写真がでていたので、野間先生にならって岡田が「箕作家の人びと」につきかたった。

箕作阮甫にセキ、つね、しんの三女があり、それぞれを優秀な門下生にとつがせ、孫や曾孫の女もまた優秀な学者にとついでるので、巨大な箕作山塊ができた（文聰、秀三はセキの子である）。阮甫の孫新六には、穂積八束やぶかの娘がとついでいる。穂積一族にも優秀な、著名人が集積している。穂積一族の中核は法学者であるが、その先は実業家、政治家、軍人、学者につながっている。対照的に箕作一族はほとんどが学者でしめられている。

戦前の教科書には箕作一族を学者の遺伝の例としてあげているものがあつたときく。洋学弾圧期に箕作一族は、蘭書によむ父の声がたかいと娘がたしなめる、というように身をひそめていきた。また維新後、たとえば阮甫の孫で法学者の麟りん

祥しやうは法律関係の翻訳をおしつけられて、いわば明治政府にかいころされた。こういう経験のなかで、「権可変字不易」といった人生観が一族にできあがっていったのだらう。だから、学者同士が身をよせあつて、うちにまた学者をそだてていく、という姿勢ができあがったのである。それは環境と遺伝との相乗作用であつた。

実は、戦前内村祐之教授から日本画の狩野家の遺伝学的研究を命ぜられた津川武一氏は、門下の優秀な人を娘に結婚させ、子は幼時から日本画のなかにそだつ、このことが狩野家をつくりあげた、との結論に達した。この結論は遺伝説を期待した内村教授の氣にいらざ、自分がうとんぜられる原因の一つになつたと、津川氏はわたしにかたられたことがある。箕作山塊形成についてのわたしの見方は、この津川氏にまなんだものである。

(一九九四年一二月例会)

◇◇◇◇◇ 紹 介 ◇◇◇◇◇

医療人類学研究会編『文化現象としての医療』

本書は、便利で、刺激的で、いくらか危険な医療人類学の用語集である。

DNR、医療化、ヘルシズム、身体化、ノーマライゼーシ

ョン、ステイグマ、文化結合症候群、ロイヤル・タッチ、メ
ディカル・ファクション、カニバリズム、エルステ、アサイ
ラム、ダブルバインドなどという言葉を書いて、何のことも
理解できる人が、医療関係者を含めてどのくらいいるだろ
うか。

本書では、これらを含めて全部で一〇〇の用語について、
医療人類学研究会の新進気鋭の一三人のメンバーにより、解
説がなされ、またそれをキーとして、医療とそれをとりまく
時代が読み解かれている。

医療人類学は、もともと第二次大戦後、発展途上国での保
健医療を進める目的で欧米を中心にして始まり、一九七〇年
代に大きく発達した領域である。研究対象は先進国の医療を
もカバーするようになり、その文化的社会的側面について研
究している。日本では、一九八〇年代から動きがあり、それ
以前からの文化人類学者、主に米国でトレーニングを受けた
研究者、さらに若手の医療関係者などを中心に活動がなされ
ているが、医療社会学、医療地理学などと同じく、そのアイ
デンティティーがまだ十分には固まっていない。

医療人類学研究会は、当時の大阪大学の中川米造氏に関係
する関西の若手の研究者によって一九八八年に作られ、その
ニューズレターとして隔月刊の「医療人類学」が発行された。
その中で「えちもろじ」として毎回掲載された用語の解説
が本書の発端である。今回の一〇〇語の内、七九語は加筆修
正されたり新たに書き下ろされたもので、他は「えちもろじ